

# 釧路海岸における海鳥の繁殖記録

矢萩 樹<sup>\*1</sup>・貞國 利夫<sup>\*2</sup>

Records of seabirds breeding on Kushiro coast, Hokkaido

Tatsuki YAHAGI<sup>\*1</sup> and Toshio SADAKUNI<sup>\*2</sup>

## はじめに

北海道東部太平洋沿岸には、大黒島やケンボッキ島、ユルリ・モユルリ島、ハボマイモシリ島など、国内でも有数の海鳥繁殖地が数多く存在する。これらのサイトでは、環境省のモニタリング1000事業や地元NPO団体の活動により、継続的な海鳥の繁殖調査が実施されている。しかし、これらのサイト以外の地域では継続的な調査が行われていないため、過去に調査が行われたが長い期間未調査であったり、これまでに調査が実施されていなかったりする地域も存在する。結果として、北海道内における海鳥の繁殖地や繁殖状況について、その全容は解明されていない。さらに、環境省のレッドリストに掲載されていなく（環境省2015）、北海道では普通種であるオオセグロカモメ*Larus schistisagus*の繁殖数が減少している（生物多様性センター2015）。同じく普通種のウミウ*Phalacrocorax capillatus*は、国内の繁殖地の中心である天売島や知床半島で、繁殖数の減少が確認されている（生物多様性センター2015）。また、カワウ*P. carbo*やオオセグロカモメは繁殖地として、新たに港湾施設に進出し始めている（カワウについては渡辺2016、オオセグロカモメについては大泰司・中川1998；長谷部2015；渡辺2016；矢萩2016）。このように、北海道における海鳥の繁殖状況は刻々と変化している。海鳥の保全のためには、希少種のみならず、前述したような種の繁殖地や繁殖状況を明らかにすることも必要不可欠である。

釧路市東部から根室半島にかけての太平洋沿岸には、海鳥の繁殖地に適した断崖や岩が存在しており、これまで調査が行われていない地域においても海鳥が繁殖している可能性が考えられた。そこで筆者らは、釧路市紫雲台から釧路町尻羽岬にかけての海岸線で、海鳥の繁殖状況について調査を実施した。釧路町海岸域においては、1996年にオオセグロカモメ136つがい、ウミウ98つがいの繁殖が確認されていた（Osa & Watanuki 2002）。また、釧路市東部では、70つがいほどのオオセグロカモメの繁殖が確認されていた（橋本1977, 1978, 1979a, b, 1980）。以上の状況を踏まえて、今回は以下の3つの目的で調査を実施した。

1つは、釧路市紫雲台から釧路町尻羽岬における、海鳥の繁殖地と繁殖数を明らかにすることである。前

述したように、海鳥の保全にとって、繁殖地と繁殖状況に関する情報は基礎的な資料として重要である。

2つ目は、尻羽岬におけるコシジロウミツバメ*Oceanodroma leucorhoa*の繁殖の有無を確認することである。釧路市立博物館（1985）はコシジロウミツバメについて、「大黒島に数十万羽生息し、そのほか霧多布島や釧路町尻羽岬でも繁殖する」としている。しかし、その後は、尻羽岬における本種の繁殖について記載した文献は見つからない。本種の国内での繁殖地としては、北海道のケンボッキ島、大黒島、厚岸小島、ハボマイモシリ島、岩手県の日出島、三貫島の6か所が知られている（佐藤文男1988；エトピリカ基金2013, 2015a；生物多様性センター2015）。このうち大黒島は国内最大の繁殖地であるが、繁殖数は減少している（生物多様性センター2010, 2013, 2015, 2016；大門2016）。大黒島に近い厚岸小島では、崩落防止ネットの設置や土壌の流出の影響により営巣数の激減が確認されている（エトピリカ基金2013）。さらに、ハボマイモシリ島では、一時、繁殖が壊滅した（エトピリカ基金2011）。また、日出島および三貫島では、土壌流出や東日本大震災による津波の影響によって本種の営巣地が不安定な状況となっている（生物多様性センター2015）。以上のような本種の国内における繁殖地の現状を考慮すると、尻羽岬における本種の繁殖情報の事実確認をする必要があると考えた。

最後に、海鳥の繁殖に影響を与えていると指摘されているオジロワシ*Haliaeetus albicilla*の生息状況を確認することである。北海道東部太平洋側におけるオオセグロカモメの繁殖数減少の要因には、オジロワシによる捕食・攪乱の影響が指摘されている（千嶋2014；エトピリカ基金2015b；生物多様性センター2015）。このことから、海鳥の繁殖地とオジロワシの生息状況、さらに海鳥への影響を合わせて明らかにする必要があったと考えた。

以上の目的から2016年に調査を実施したので、本稿ではその結果について報告する。

## 方法

調査は、釧路市紫雲台（北緯42° 57′，東経144° 24′）から釧路町尻羽岬（北緯42° 56′，東経144° 46′）にかけての海岸線および港湾施設で実施した。調査時期は、海鳥の繁殖期である6-7月とした。本調

\*1 釧路公立大学・北海道海鳥保全研究会 Kushiro Public University, Hokkaido Seabird Conservation Group

\*2 釧路市立博物館 Kushiro City Museum

査では、釧路市紫雲台から釧路町尻羽岬の海岸線における繁殖状況の調査、尻羽岬におけるコシジロウミツバメの生息調査、尻羽岬における定点調査の3項目の調査を行った。

釧路市紫雲台から釧路町尻羽岬にかけては、高さ約50-100mの断崖が続いており、海岸近くには陸から孤立した岩も存在する。また、海岸線の標高の低い谷部や海岸上部の平地には村や集落が点在している。尻羽岬は、釧路町に位置し、太平洋に突き出した岬で、厚岸湾を形成する。岬の上部は台地になっている。

釧路市紫雲台から釧路町尻羽岬にかけての海岸線における繁殖調査は、釧路市で6月28日および6月30日に、釧路町で7月11日および7月12日の日中に実施した。調査では、海岸を見渡せる地点まで行き、崖や岩を観察した。また、前述したように港湾施設で営巣する海鳥が出現していることから、調査範囲内の桂恋漁港（北緯42° 56′，東経144° 26′），昆布森漁港（北緯42° 57′，東経144° 31′），老若舞漁港（北緯42° 56′，東経144° 43′）の3ヶ所の漁港も調査対象地とした。漁港での調査の際には、建物の屋根やテトラポット、防波堤、ふ頭についても観察した。観察地点の多くは、アクセスの都合上、集落やキャンプ場が主となった（図1）。観察では、8-10倍の双眼鏡と25-60倍の望遠鏡を用いて、海鳥の巣を探した。海鳥の巣を発見した場合には、種名と巣数を記録し、地図上にそ

の位置を落とした。同時に、調査地点で観察されたオジロワシの個体数を記録した。オジロワシによる海鳥への影響が観察された場合は、その内容についても記録した。

尻羽岬におけるコシジロウミツバメの生息調査は、2016年7月11日に実施した。本種は巣穴営巣性で、日没後に帰巣する生態を持つことから（高野1981），巣穴の捜索と夜間定点調査を行った。巣穴の捜索は、7月11日の日中に行った。尻羽岬の海岸上部を踏査し、コシジロウミツバメの巣穴を探した。アクセスできないような環境は、8-10倍の双眼鏡を用いて巣穴を探した。夜間定点調査は、7月11日の20:30から22:00にかけて行った。定点調査では、岬先端部に座り、コシジロウミツバメの鳴声の聞き取りと可能な範囲で飛来個体を目視で確認した（図2）。

尻羽岬における定点調査は、コシジロウミツバメの夜間定点調査地点と同様の地点で、7月11日と7月12日の日中に実施した（図2）。調査では、岬先端部に座り、8-10倍の双眼鏡と25-60倍の望遠鏡を用いて周辺を観察し、出現した海鳥の種名と個体数を記録した。

結果

調査の結果、ウミウ117巣とオオセグロカモメ32巣が確認された（表1，図3，4，5）。ウミウの営巣は、すべて海岸の崖や岩で確認された。オオセグロカモメの営巣は海岸の岩で26巣と建物の屋根で6巣が確認された。

オジロワシは重複の可能性があるが、延べ数で8個体が観察された（表1，図3，6）。海鳥の繁殖への影響としては、オジロワシの襲撃による、ウミウのヒナの巣外転落が確認された（図7）。

尻羽岬におけるコシジロウミツバメの生息調査では、巣穴は確認されなかった。夜間定点調査では、複数のコシジロウミツバメの鳴声を確認した。また、調査日には月明かりによりコシジロウミツバメの姿も確認でき、延べ数で23個体を確認できた。今回の調査では、尻羽岬におけるコシジロウミツバメの繁殖に関する手掛かりは得られなかった。

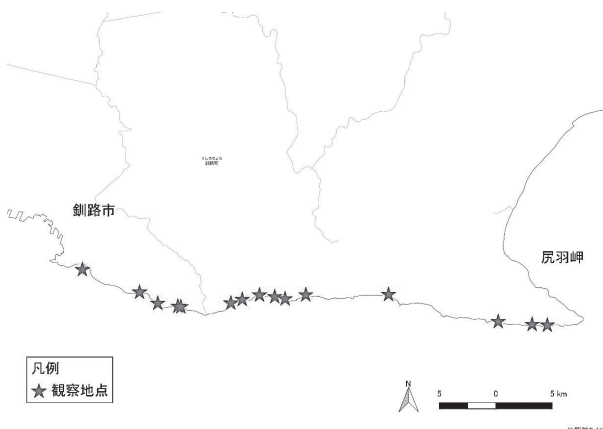


図1. 観察地点

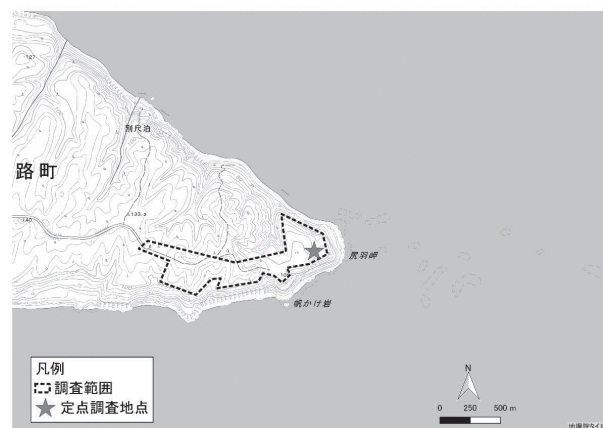


図2. コシジロウミツバメの巣穴捜索範囲と定点調査の観察地点

表1. ウミウおよびオオセグロカモメの営巣状況とオジロワシの観察個体数

種名	営巣地数	営巣数
ウミウ	8	117
オオセグロカモメ	2	32
オジロワシ	8 (個体数)	

尻羽岬での定点調査で観察されたのは、オオミズナギドリ *Calonectris leucomelas*，ウミウ，ヒメウ *P. pelagicus*，ウミネコ *L. crassirostris*，オオセグロカモメ，トウゾクカモメ sp. *Stercorarius* sp.，ウトウ *Cerorhinca monocerata* だった。種が判別できなかったトウゾクカモメ sp. を除くと、4科6種が観察された。それぞれの個体数の2日間の合計は、オオミズナギドリ494個体，ウミウ113個体，ヒメウ19個体，ウ

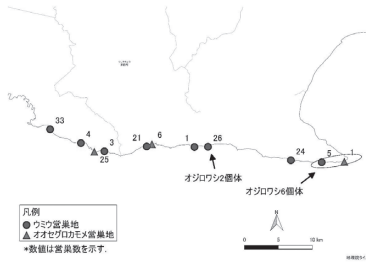


図3. ウミウおよびオオセグロカモメの営巣地点とオジロワシの観察地点



図4. オオセグロカモメのヒナと成鳥



図5. ウミウの営巣



図6. 観察されたオジロワシ

ミネコ75個体、オオセグロカモメ72個体、トウゾクカモメsp. 2個体、ウトウ79個体だった(表2)。海鳥の繁殖に関する手掛かりは得られなかった。

表2. 尻羽岬での定点調査で確認された海鳥の個体数

種名	個体数
オオミズナギドリ	494
ウミウ	113
ヒメウ	19
ウミネコ	75
オオセグロカモメ	72
トウゾクカモメ sp.	2
ウトウ	79

## 考察

### ウミウ、オオセグロカモメの繁殖状況とオジロワシによる影響

ウミウの繁殖数は、Osa & Watanuki (2002) の記録から大きく変化していなかった。一方で、オオセグロカモメの繁殖数は減少が確認され、橋本 (1977, 1978, 1979a, b, 1980) に記載のある釧路市三津浦 (北緯42° 94', 東経144° 48') での繁殖は確認されなかった。北海道の海鳥繁殖地におけるオオセグロカモメの繁殖数の減少には、エサ資源の減少や捕食者の影響が指摘されているが (生物多様性センター2015)、今後さらなる調査が必要だろう。

今回の調査により繁殖が確認された両種は、北海道では普通種として注目度が低いことが想定される。しかし、両種の分布域は極東の一部に限られ、世界的に見ると分布の狭い種である (Harrison1983)。そのため、日本の繁殖地の中心である北海道の繁殖個体群の存在は、重要であると考えられる。今後も、両種の繁殖状況については、その動向に注目していく必要があるだろう。また、本調査で海鳥の繁殖が確認されたように、これまで未調査となっている他の地域においても、海鳥が繁殖している可能性が考えられる。北海道における海鳥の繁殖状況を明らかにするためには、そのような地域で調査が実施されることが望ましい。



図7. オジロワシによる攪乱が確認されたウミウの営巣地

また、今回の調査では、陸上から目視できる範囲はある程度調査できたと思われるが、死角があるため、正確な繁殖状況の把握には至っていないと考えられる。よって、今後は海上からも調査し、全域を把握する必要があるだろう。

北海道東部太平洋側の海鳥繁殖地で報告されている、オジロワシの影響が本調査でも確認された。確認された影響は、2個体のオジロワシがウミウの繁殖地に接近した際に、複数の巣立ち前のヒナが繁殖地から海上に飛び降りたというものであった。その後もオジロワシは、ウミウの繁殖地への飛来と飛翔を繰り返していた。本調査の調査地を含め、オジロワシによる捕食や攪乱は、明らかに北海道の海鳥の繁殖に影響を与えている。オジロワシによる海鳥の繁殖への影響については、今後さらなる調査および何らかの対応が必要となってくるだろう。

### 尻羽岬におけるコシジロウミツバメの生息状況

今回の調査でコシジロウミツバメの巣穴を確認できなかったが、尻羽岬において、コシジロウミツバメが繁殖している可能性は極めて低いと考えられる。国内における本種の繁殖地は全て島嶼にある。これは、本種がキタキツネ *Vulpes vulpes schrencki* やドブネズミ *Rattus norvegicus* 等の捕食者の影響にきわめて脆弱であり (エトピリカ基金2011)、これらの捕食者の生息しない島嶼が繁殖地に適しているためだと考えられる。実際に、ハボマイモシリ島での本種の一時的な壊滅は、アメリカミンク *Neovison vison* の侵入が直接的な原因だと考えられている (エトピリカ基金2011)。北海道本土には、以上に上げたような陸上の捕食者が生息しているため、本種の繁殖地として適地ではないだろう。このため、本種が尻羽岬で繁殖していることは考えにくい。

釧路市立博物館 (1985) によるコシジロウミツバメの繁殖情報は、誤認の可能性も考えられる。本種は、

夜間に繁殖地以外にも飛来することが知られている。また、尻羽岬は、国内最大の繁殖地である大黒島に近いこともあり、大黒島での繁殖個体が通過、飛来している可能性もある。釧路市立博物館（1985）の記述は、これらの飛来個体の観察から、誤認した記述の可能性が考えられる。

#### 尻羽岬における定点調査

尻羽岬での定点観察では、海鳥の繁殖の確認には至らなかった。ただ、ウミウについては、尻羽岬と沖合を往復する個体が数多く観察できたため、岬の崖部などで繁殖している可能性が考えられた。しかし、今回の調査は陸上からの観察だったため、観察できない範囲があった。海上からの調査により、新たな繁殖を確認できる可能性がある。

最も多く観察されたオオミズナギドリは、沖合2-3km付近で観察された。7月12日には300個体ほどの群れが見られ、海面に飛び込む姿や海上に浮いている姿も観察された。この観察から、尻羽岬の周辺海域は、本種の採食海域として利用されていることが示唆された。本種は、北海道では渡島大島のみで繁殖が確認されているが（Osa & Watanuki 2002）、その数は急激に減少し、2011年の調査による繁殖数は10巣とされている（生物多様性センター2012）。そのため、今回観察された個体は、本州以南での繁殖個体群であると考えられる。

#### 謝辞

本稿執筆の機会をくださいました、釧路市立博物館の皆様には厚く御礼申し上げます。

#### 引用文献

千嶋 淳. 2014. 北海道の動物たち 人と野生の距離. ホーム社, 東京.

エトピリカ基金. 2011. 根室市の小規模離島における海鳥の現状. 一般財団法人前田一歩園財団.  
<http://www.ippo.or.jp/nature/report2010.html#c02>.

エトピリカ基金. 2013. 北海道東部における海鳥繁殖地の保全活動. 平成24年度（第27回）タカラ・ハーモニストファンド活動助成報告.

エトピリカ基金. 2015a. 浜中町海鳥・海獣繁殖調査 H27年ウミネコ・コシジロウミツバメ繁殖調査. NPO法人エトピリカ基金.

エトピリカ基金. 2015b. 浜中町海鳥・海獣繁殖調査 H27年ウミウ・オオセグロカモメ・ケイマフリ繁殖調査. NPO法人エトピリカ基金

Harrison, P. 1983. Seabirds An Identification Guide. Houghton Mifflin Company, Boston.

長谷部真. 2015. 北海道北西部におけるオオセグロカモメの人工物上の巣数. 利尻研究, 34 : 33-35.

橋本正雄. 1977. オオセグロカモメの繁殖行動 I. 釧

路市立郷土博物館紀要, 4 : 1-19. .

橋本正雄. 1978. オオセグロカモメの繁殖行動 II. 釧路市立郷土博物館紀要, 5 : 17-30.

橋本正雄. 1979a. オオセグロカモメの繁殖行動 III. 釧路市立郷土博物館紀要, 6 : 17-26.

橋本正雄. 1979b. ゴメの話. 釧路市, 釧路.

橋本正雄. 1980. オオセグロカモメの繁殖行動 IV. 釧路市立郷土博物館紀要, 7 : 11-17.

環境省. 2015. レッドリスト【鳥類】. 環境省.  
<http://www.env.go.jp/press/files/jp/28057.pdf>.

釧路市立博物館. 1985. 釧路市立博物館解説シリーズ 9. 釧路市立博物館, 釧路.

大門純平. 2016. 大黒島で繁殖する海鳥の繁殖数推定. 北の海鳥, 3 : 8-16. 北海道海鳥保全研究会.

大泰司紀之・中川 元. 1988. 知床の動物. 北海道大学図書刊行会, 札幌.

Osa, Y. & Watanuki, Y. 2002. Status of Seabirds Breeding in Hokkaido. Journal of the Yamashina Institute for Ornithology, 33(1):107-141. Yamashina Institute for Ornithology.

佐藤文男. 1988. 北海道ハボマイモシリ島調査報告. 日本鳥類標識協会誌, 3 : 20-21. .

生物多様性センター. 2010. 平成21 年度重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト1000）海鳥調査業務報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.

生物多様性センター. 2012. 平成23年度モニタリングサイト1000海鳥調査報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.

生物多様性センター. 2013. 平成24年度モニタリングサイト1000海鳥調査報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.

生物多様性センター. 2015. 重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト1000）海鳥調査第2期とりまとめ 報告書. 環境省自然環境局 生物多様性センター, 富士吉田.

生物多様性センター. 2016. 平成27年度モニタリングサイト1000海鳥調査報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.

高野伸二. 1981. カラー写真による日本産鳥類図鑑. 東海大学出版会, 東京.

渡辺義昭. 2016. 網走港で繁殖している海鳥2015. 北の海鳥, 2 : 8-16.

矢萩 樹. 2016. 釧路市の港におけるオオセグロカモメの営巣状況. 釧路市立博物館紀要, 36 : 31-34.